

館の使命	千葉県立中央博物館は、地域の市民と共に、自然と歴史に関わる資料・情報を収集・蓄積するとともに、基礎的・国際的視野に立つ科学研究により、その新たな価値を発見し、教育、展示、その他全ての博物館活動を通して県民や市民へ発信し、県民共有の知的資産として未来へ伝えます。また、千葉県の中核的综合博物館として、さまざまな市民の幅広い知的ニーズに応えつつ、双方向の交流を通して、その生涯学習拠点となります。
事業名	平成27年度企画展「妖怪と出会う夏 in Chiba 2015」、及び、関連事業「妖怪縁日」
概要	平成26年度から実施している千葉県博図公連携事業の一環として、同事業で県民から得られた妖怪にまつわる諸情報を盛り込んだ形で企画展及び関連事業を展開している。また、連携している県内博物館や図書館、公民館においても、館種を超えたネットワーク事業を同時開催している。以上のことから、現在、中央博物館が実践しているインタラクティブミュージアムを具現化した一事業である。

評価項目	視点例	目標・指	実施内容	結果・成果	今後の課題	所見・指摘事項
①事業目的	・事業の目的、企画の狙い等は、館の使命及び県民ニーズに照らし適切に設定されているか	館の使命に則した事業趣旨を設定し、詳細な事業の構築を図り実践する。	館使命に則した企画展趣旨、関連事業の趣旨を設定し、当該趣旨のもとで各事業の構築を図るとともに実践する。	当館の使命にある「市民との協働、センター館」としての事業構築と展開を具現化した。特に、事業の基盤となっている博図公連携企画による博物館、図書館、公民館の協働事業はもとより、そこに県民自らが参画した事業展開を実施した。	使命の具現化に向けてさらなる展開を目指す必要あり。	【石川】 広い年代層を意識した県民性の高い企画で、県立博物館の存在をアピールできる優れたものである。 【村井】 連携・協働事業の核としての役割を果たしたこと、県民参画の機会を設けたことを高く評価したい。
		幅広い年齢層が、分かりやすく、親しみやすく、楽しく学ぶことができる場を設定する。	展示及び関連事業の実施に際しては、幼少から年配の方に至るまで、多岐に渡る学びを創出することができる内容とする。	展示については子どもの興味関心を助長する手法として、自ら取り組むことできっかけづくりと同時に達成感をも得ることができる参加型のプログラム（妖怪ノート）を導入し、8,350人の参加があった。また、妖怪というテーマであったが、歴史的、民俗学的、文学的背景、本県固有、または発見された妖怪も多く取り入れることで親近感を持たせ一般にも満足してもらえる内容とした。併せて、関連事業は子ども対象のものとは一般対象のものに分けることで、幅広い利用者層への対応も図った。	左記の事業展開を行ったが、幅広い層に対応した事業展開の難しさは改めて認識した。妖怪ノートにおいても利用者が取り組む姿勢は大変良かったし、何より展示や博物館事業を理解する上でのきっかけづくりには大いに効果があった。しかし、当プログラムに集中する結果、肝心の資料と対峙し、モノを見る行為が若干希薄になったことも確かである。これに関しては、今後の事業展開時において、関係者間で協議していく必要がある。	【村井】 幅広い年齢層に向けた多様なプログラムを館の職員らが力を合わせ、実施した体制を評価したい。 視察日は、イベントが開催されており、たくさんのお客様が訪れており、その喜びで職員が自然に笑顔となり、幸福の連鎖が館内に溢れていたと思う。研究員や館内スタッフがそうした経験を積み上げることで、利用者サービスの質を高めることができるのではないだろうか。

		県民ニーズを反映した事業展開とする。	過去の企画展、常設展等において来館者、利用者から発信された希望、意見等を事業に反映させる。	企画展示に関しては、個々の展示においてアンケート調査を実施し、そのデータを検証した上で事業等に反映させている。	P.D.C.A. マネージメントサイクルを徹底強化する。	【村井】 館の取組方針を曲げてまでニーズに対応させる必要はないが、できることは改善してほしい。
②事業内容	・目的・ねらいを正しく反映する工夫がなされているか	分かりやすく、楽しむことができる展示の工夫を取り入れる。	企画趣旨に則した単元構成を行い、どの年齢層においても単元が目で見えるようにグラフィックの彩色を変えるなどの可視化を図っている。また、妖怪のキャラクターを随所に配置する他、河童の声や地獄に堕ちた者を救済するという経の口上を流すなどの音声資料も盛り込み、楽しみながら見学することができる仕組みを導入している。さらに、常設展示、生態園においても関連の展示を紹介するなど、中央博物館全エリアを当企画事業の展開エリアと位置づけている。	今回の展示造作、及び、単元構成は、子どもから大人まで幅広い層が満足することができるといった。加えて、博物館と利用者との関係強化、関係継続性等を考慮に入れたプログラム（かっぱへのおたより）は、3,087人の参加者から分かるように所期の目的を果たしたと言える。これらの取り組みにより、入場者数、入場料収入等の面において目標値を大きく超えることができたと考えている。	今回のような成功事例のノウハウや課題、解決すべき内容等について館全体で共有し、事業の継続性を強化する必要がある。	【石川】 暗すぎない展示。難し過ぎない説明。工夫のあとが随所に見られた。 【村井】 「かっぱへのおたより」は、利用者や研究員のインタラクティブな関係性を生み出すプログラムだったと思う。他の館でも導入し、千葉県立の博物館の特徴的な事業として成長させてほしい。 企画展の内容（ソフト）には問題がないが、企画展示室のハードの弱み（狭い）を改めて露呈させたと思う。今後、さらにおもしろい企画展を開催していくためには、ハード面の見直しが必要。この課題については、長期的な観点から検討してほしい。
	関連事業の実施にあたり、企画展示の趣旨に則した展開を図る。	会期中の土日祝は参加型の関連事業を取り入れるとともに、親子で体験しながら参画することができる学習プログラムも考案し実践する。	上記に記述したとおり、妖怪というキーワードで“親子同士での対話”、“館員と来館者との対話”、“かっぱと来館者との対話”等を具現化することができた。	展示テーマや内容等により、個々の企画が館の使命、当該事業の使命と整合性がとれていることを常時意識していく必要あり。	【石川】 職員の協力度が高く、親しみのある企画展であったと考えている。 【村井】 職員の負担は大きくはなるが、今後も継続して続けてほしい。他館でも多様な対話を生み出す工夫をしてほしい。	

		事業周知のため、多角的な広報戦略を導入する。	ポスター、チラシをはじめとした活字媒体をはじめ、WEBの公開、公共交通機関への掲出、メディアの活用を積極的に実践するとともに、博物館周辺には企画展関連の幟を多数配置するなど、多角的な広報戦略を展開している。	ポスター、チラシ等活字媒体の配布は、地元の学校はもとより、博図公連携事業の強みを最大限活用して、社会教育機関に限定せず、観光集客施設等県内の随所に掲出、配架した。また、メディアへの情報提供を厚くし、情報提供の時期や回数を工夫したため、40件に及ぶ放映、掲載等があった。さらに有料広告として、JRの県内ローカル線全車両（千葉以東450車両）へのポスター掲出を一月間実施、行事の周知に努めた。	展示テーマや内容、さらには対象等により戦略的な対応を具現化すべき。	【石川】 年々、広報面で充実が図られている。ポスター、チラシ、学校からの情報からの情報等、インターネット等、さらなる努力をしたい。 【村井】 夏季の企画展は、学校から子どもへ、家族への情報の流れを重視すべきかもしれない（アンケートの結果より） 学校が休みに入る前に、児童生徒にチラシ配布、校内でのポスター掲出は、今後も他の館でも行ってほしい。
③運 営	・事業展開に際し、館内の実施体制の取り組みに工夫が成されているか、また、他機関、他施設等との連携体制がとられているか。	中央博物館の多分野の研究員が一体となり事業推進を図る。	中央博物館の自然誌系、人文系の専門職員はもとより、事務系職員も加わった形でプロジェクトチームを編成し、事業企画から事業実践に至るまで全館体制で取り組んでいる。	当館の自然誌系、人文系の専門職員によるプロジェクトチームを組織し、企画実施を図った。多分野の専門職員が係わることで多角的な視点による実践ができたと考察している。	多分野の専門職員によるプロジェクトが可の事業もあるが、実施テーマによってはかえって視点が多岐に渡りすぎることによって統一性に欠ける展開となることも推測されるため、十分な議論を経て、実施体制を構築すべきだろう。	【村井】 中央博物館の人的資源を生かした実施体制だと思う。他の館ではできない取組だと思う。今後も、こうした体制で取り組んだ中央博らしい企画展を開催してほしい。
		異業種、館種を超えたネットワーク事業の展開を積極的に取り入れる。	平成26年度より、千葉県博図公連携事業と称し、博物館、図書館、公民館が一体となった事業展開を実践している。	博図公連携事業として、各組織、各施設が得意とする分野、カテゴリーでの事業展開はもとより、それぞれのノウハウや情報網等を最大限活用した協働事業等の取り組みが具現化された。	館種を超えたネットワークや異業種ネットワークの必要性と重要性は多く議論され、具現化されているが、実施体制の構築と、企画、展開時の各組織の体制構築が重要。	【村井】 今回の3カ年に渡る連携・協働事業は、地域内外に中央博の役割を示すことができたと思う。今後も、引き続き実施していくためには、しくみとひとが鍵となるはず。組織改編や兼任制（事例：ひと博）も含めて検討すべきと思う。

	<p>県民と協働した事業実施体制を図る。</p>	<p>千葉県博図公連携事業では、県民から妖怪やもののけの情報を1年間かけて約1,100枚の情報を収集した。今回の企画事業はその成果の還元も主要な柱となっている。また、オープニングセレモニーではチーバくんをはじめとした県内市町村のキャラクターとともに、広く県民に募集をかけて集まった妖怪コスプレによる「百鬼夜行」を実施した。夏休み期間中に開催した「妖怪縁日」では実行委員会加盟館以外の県内の博物館・図書館・公民館で活動する県民の5団体の参加を得て、地域の伝承を語る「妖怪百物語」を実施した。さらに、河童へのおたよりと称した手紙のやりとりによる見学者と河童（館側）との交流を継続させる仕組みを導入している。</p>	<p>左記のとおり、県民からの情報提供によるデータを活用した展示構成を取り込んだことをはじめ、参加・対話型のプログラムを会期中展開することで、2力年に渡る県民との協働事業が展開できた。このことで、県民等博物館利用者側においても、ミュージアムリテラシーの向上を図るきっかけにもなっていると推察する。</p>	<p>上記ネットワーク事業の展開時も同様だが、全体のコーディネーターの役割が大変大きい。併せて、事業の柱をあまり多角的にならないように調整していく必要もある。</p>	<p>【村井】 同上</p>
	<p>事業実施にあたり、外部資金の導入を図る。</p>	<p>平成26年度・27年度ともに、文化庁の文化芸術振興補助金（地域と協働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業）を活用して事業実施を図っている。</p>	<p>左記により、県費だけでは展開が難しい取り組みを具現化することができた。当事業は3力年継続事業と位置づけているため、次年度においても26年度27年度の事業を考察し、次に昇華させるための事業を計画している。</p>	<p>外部資金の利活用は必要不可欠な状況であるが、その採択如何により事業の内容、規模等を数案準備しておく必要がある。また、特に文科省、文化庁の補助金については、その経費が年度末にしか配分されないという課題は大きい。結果、県側で経費面の調整を行う必要がある。</p>	<p>【石川】 苦労は多いかもしれないが、これからも財源の確保に一層の努力をお願いしたい。</p> <p>【村井】 外部資金の導入は課題もあるが、質の高い事業を県民に提供できる上に、県内の文化施設の活動も協働・連携によって活性化させることができるので、今後も積極的に外部資金獲得に取り組んでほしい。</p>

重点事業評価票

千葉県立中央博物館

④満足度	・お客様は、満足してくれましたか	・入場者数が多い。 目標人数： 40,000人 (有料入場者予定人数： 9,920人)	—	・総入場者数：44,702人（目標人数：40,000人 112%） ・有料入場者数：12,027人（目標人数：9,920人 121%） ・無料入場者数：32,675人（目標人数：30,080人 109%）	さらなる目標達成に向けた努力。	【石川】 満足度も高く、家族連れにも喜ばれた良い企画であった。
		・入場料収入が多い。 (目標値：1,898)	—	・入場料収入（差額分）：2,329,760円 (目標値：1,898,000円 123%)	さらなる目標達成に向けた努力。	
		・アンケート調査での「面白かった」「大変面白かった」の回答数が80%以上	—	展示テーマの満足度は89.4%が支持してくれたが、全体的な満足度としては、79.5%が「非常に満足」、「満足」であった。	テーマ設定の魅力はあったものの、満足度が10%ほど低かったことについては展示内容、事業内容とうの検証が必要。	【村井】 全体的な満足度は、無記入を除けば271/306で88.6%となる。データの確認を要するが、この設問が子どもやアンケート慣れしていない人には判断しづらかった可能性がある。無記入が多い理由を検討すべき。

総合評価

【石川】

初来館が53%、4回以上が25%で来館満足度も高く、県立博物館としての存在意義を高めた優れた企画展であった。職員の協力度も高いことが、親近感のある印象を与えたと考える。アンケートでわかりやすい、見やすい、かわいい絵等の好評部分は、今後の展示にも生かしてもらいたい。限られた予算の中で、職員の協力により成功できたもので、敬意を表する。

【村井】

県民、利用者、県内の文化施設との多様なインタラクティブな関係性を生み出す事業であったと思う。中央博がめざしているインタラクティブミュージアムを具現化できていると思う。こうした事業を推進していくためには、しくみづくり（組織、人材育成、ルールなど）が重要。今後、県立博物館全体の取組方針に成長・発展できることを願っている。

対 応

現在、2カ年目となる博図公連携事業の一環として当企画展を実施したが、各教育施設をはじめ県民との間でインタラクティブな関係を具現化することができた一事例であると評価している。しかし、反面、館種や業種を超えたネットワーク事業の具現化に際しての課題もかなり現出したことも事実である。「今後の課題」の中でも触れたが、学術研究機関である博物館が「研究成果の公開」というカテゴリーで事業を展開する場合、これらのネットワークやプロジェクト体制が最適な手法かどうかに関しては、今後、大いに検証していく。

有識者からの指摘にもあるように、中央博物館だけではなく、千葉の県立博物館、さらには、県内博物館等において、こういった手法で事業展開を推進していくためには、正に、実施のための「しくみづくり」が最重要課題である。

センター館としての使命を担っている中央博物館としては、そのPhase1として、県立博物館関係者間において当該手法や多岐に渡るノウハウ等を共有するための研修等を実施することで専門職員のスキルアップを行うとともに、その実施体制を構築する。併せて、今回の実践をベースに次のステップに昇華させたネットワーク事業をP.D.C.A. マネージメントサイクルの中で具現化することとする。

アンケートの無記入が多かった件に関しては、妖怪展示チーム及び連絡調整会議（科課長以上の館員で構成）、そして幹部会議（部長以上）において協議し、対応策を策定済み。今回の企画展においては、入場者数に対するアンケートの回収率は0.76%と低かったため、今後のアンケート収集に際しては、アンケートの配架場所や意見聴取の手法、アンケート内容等について、事業担当者（担当科）だけではなく展示チーム、館内諸会議の場で充分協議した上で実施することとする。